

(別添6-2)(用紙寸法は、日本工業規格A列4とする。)

# 成果報告書

## 1. 事業の題名

「 KOBE しあわせの村ユニバーサルカレッジ 」
---------------------------

## 2. 委託事業の実施期間

令和3年6月9日から令和4年3月10日まで

## 3. 任意で実施する取組(実施する場合のみ、○を記入)

ブロック別コンファレンス

→実施する場合のみ、○を記入すること

## 4. 委託先組織の構成

(下記①②に必要事項を記載するほか、団体等の組織図など、組織体制の全体像が分かる資料を別途添付すること。)

### ①組織の主要構成員(役員等)

氏名	所属・役職等	備考欄
三木 孝	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 会長	
川田 誉史子	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 常務理事	
後藤 徹也	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 常務理事	
金山 千洋	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 立命館大学 産業社会学部 教授	
古和 久朋	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 神戸大学大学院保健学研究科 教授	
武田 良彦	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 公益財団法人神戸新聞厚生事業団 専務理事	
西垣 千春	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 神戸学院大学総合リハビリテーション学部 教授	
西田 勉	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 公益大団法人神戸YMCA 常勤理事	
羽原 好一	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団常務理事	
丸一 功光	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 一般財団法人神戸在宅医療・介護推進財団常務理事	

水野 ひろみ	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 前神戸市PTA協議会 副会長	
佐藤 毅	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 監事 株式会社三井住友銀行公務法人営業第二部副部長	
瀬尾 文洋	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 監事 税理士	
生安 衛	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 兵庫県健康福祉部社会福祉局長	
大辻 正忠	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 一般社団法人神戸市老人クラブ連合会 理事長	
谷村 誠	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 兵庫県社会福祉法人経営者協議会 会長	
玉田 敏郎	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 社会福祉法人神戸市社会福祉協議会 理事長	
津田 佳久	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 神戸商工会議所 常務理事	
福住 美彌子	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 神戸市民生委員児童委員協議会 副理事長	
松端 信茂	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 神戸市知的障害者施設連盟 会長	
村岡 章弘	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 一般社団法人神戸市医師会 副会長	
森下 貴浩	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 神戸市福祉局長	
山口 康志	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 神戸労働者福祉協議会 事務局長	
山本 孝子	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 評議員 神戸市婦人団体協議会 会長	

## ②事業推進担当者

事業内容について、協会内に学識経験者、医療・福祉関係者による「KOBE しあわせの村ユニバーサルカレッジ実行委員会」を設置し、専門的な知見や当事者の視点から運営手法やプログラム企画の検討を行なった。なお、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、会議開催に当たってはオンライン開催を併用した。

実行委員会(令和4年3月現在)

氏名	所属・役職等	備考欄
三木 孝	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 会長	委員長
後藤 徹也	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 常務理事	
川田 誉史子	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 常務理事	
岡本 正	株式会社 WAP コーポレーション 代表取締役	

澤田 敏夫	公益財団法人産業雇用安定センター 参与 前公益社団法人 全国障害者雇用事業所協会 理事兵 庫県支部長	
笹森 理絵	精神保健福祉士 ※	
近藤 武夫	東京大学先端科学技術研究センター 准教授	
飯島 久道	社会福祉法人神戸市社会福祉協議会 新規事業推進担 当局長	
河崎 洋子	社会福祉法人 芳友 にこにこハウス医療福祉センタ ー 施設長	
西垣 千春	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 神戸学院大学総合リハビリテーション学部 教授	
水野 ひろみ	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 理事 神戸市PTA協議会 副会長 ※	
南 謙二	特定非営利活動法人社会還元センターグループ わ 理事長	
宮野 愛子	株式会社ライフ・シンセリティ 代表取締役	
吉田 茂之	美津濃株式会社 しあわせの村屋外スポーツ施設 支配人	
奥山 隆彦	株式会社ウエルネスサプライ しあわせの村温泉健康センター 総支配人	
実平 典子	新明和ハートフル株式会社 取締役	
柳 有香	兵庫県印刷工業組合副理事長 共栄印刷株式会社 代表取締役 社長	
児玉 明子	児玉明子税理士事務所 所長 税理士	監事
受講生の中から希望する2名が参画 ※		

※家族を含む障がい当事者

## 5. 事業の実施に係る全体像

(地方公共団体と民間団体との具体的な連携内容を含め、連携先や再委託先の関係、本実践研究事業の実施に係る実施体制の全体像について図示すること。また、本事業全体を通じた目標の達成状況や、本事業終了後の目指す方向性等についても触れること。)

### 1. 理念・目標・取り組みの柱

#### 【理念】

「障がい者の生涯学習の機会創出を通じて、障がい者が自立や社会参加に向け学び続けることのできる社会の実現に寄与すること」を本事業実施における理念とした。

#### 【目標】

理念の実現のため、カレッジの運営について以下の3つの目標を定めた。

- ①社会的自立に向けた知識、一般教養を身に付ける生涯教育の場の実現
- ②学生が自らの主体性を育み発揮する生涯教育の場の実現
- ③社会性を育み仲間づくりを実現する生涯教育の場の実現

#### 【取り組みの柱】

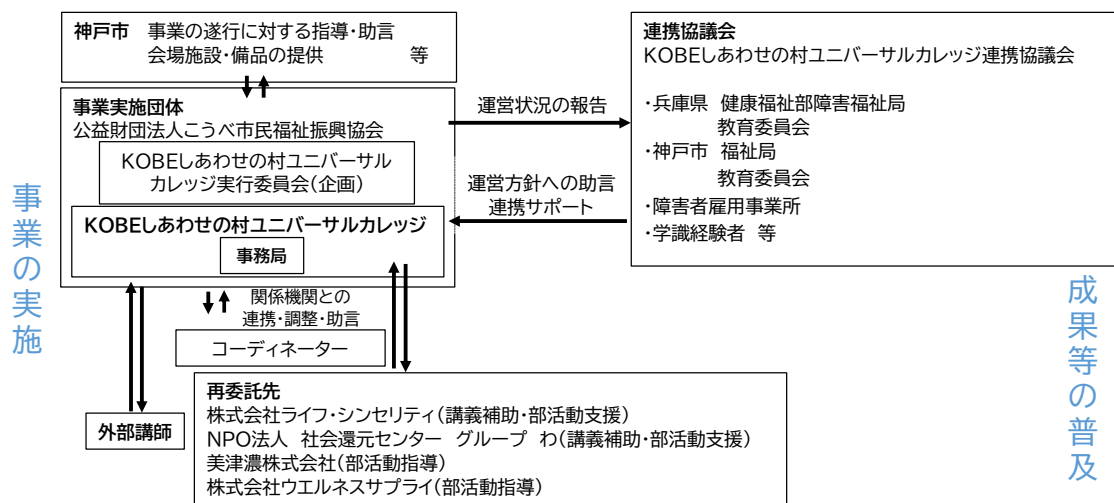
各目標の達成のため、講座運営においては以下の3つを取り組みの柱とした。

目標①について…学生の興味関心の幅を広げる幅広い分野の講義を提供する

目標②について…一部の講義や部活動の種目について受講生が自ら選択する機会を設ける

目標③について…部活動及び世代間交流の時間を設ける

### 2. 実施体制



事業期間の3年間をかけて運営手法やプログラムの開発を段階的に進め、事業終了後も、こうべ市民福祉振興協会の事業として持続的に実施できるモデルを研究する

#### (1) 実行委員会 (7回実施)

当事業の企画・実施にあたっては、障がい者の学校教育期から卒業後にかけての教育・医療・福祉・労働・生活に対する広範な知見が不可欠であるため、企画の検討と実施の主体として公益財団法人こうべ市民福祉振興協会に、学識経験者、医療・福祉関係者、家族を含む障がい当事者「KOBELしあわせの村ユニバーサル実行委員会」を設置した。

委員会ではカリキュラムや運営手法について企画・検討し、毎回の実践結果について自己評価を行ない、手法のブラッシュアップを重ねた(計7回実施)。また当事者の参画を図り、希望する受講生2名が11月より会合へ出席し、講座の感想や改善点の有無、学びたいテーマ等について

意見を交換した。

(2) 連携協議会(3回実施)

学識経験者、行政(県・市による教育・医療・福祉)、障がい者雇用事業所等により構成される連携協議会を設置し、事業の実施内容について専門的な知見からの助言を適宜行い、実行委員会によるカリキュラムや運営手法に関する自己評価について検証・評価を行った(計3回実施)。

(3) コーディネーター

連携協議会委員でもある「しあわせの村ユニバーサルコーディネーター」については、教育委員会等関係機関との連携のほか、特別支援教育について有する高い見識をもとに各運営事業者(再委託先)への指導・助言を行う等当事業全般にわたるコーディネートを担った。

(4) 再委託先

①株式会社ライフ・シンセリティ

…運営する就労継続支援B型事業所「カレッジ・アンコラージュ」より事業所利用者が毎回3名程度出役し、設営の補助、受付等の運営補助業務にあたったほか、一部の部活動や世代間交流行事では、受講生とともに活動に参加し、交流の機会ともなった。また、同事業所のスタッフは、「クラス担任」として受講生の一体感を醸成し交流を促した。また、必要に応じ受講生との接し方について他のスタッフにアドバイスする等、円滑なコミュニケーションに寄与した。支援員はそれぞれの特性を把握し細やかな目配りを行なうことで安全な事業実施の下支えとなった

②特定非営利活動法人社会還元センターグループ わ

…講座開催場所とした神戸市の高齢者生涯学習施設「神戸市シルバーカレッジ」の卒業生が中心となって設立されたボランティア組織であり、毎回の講座においてライフ・シンセリティ社と共同で、設営、登下校の安全確認、講義中の補助などの運営補助を担った。

また、いかに発揮されるホスピタリティにより、何か困りことがあればスタッフに気軽に声をかけられる関係性が構築され、受講生が安心して受講できる環境作りに寄与した。…世代間交流行事のインストラクターとして同グループ内の「マジック(手品)クラブ」「笑い届隊」の参加を得、公民館や小学校等での交流イベントの経験を生かし、ゲームやグループワーク(巨大折り鶴作り)等を通じて世代間や受講生同士の交流を図った。

③美津濃株式会社

…運動施設・教室運営経験に基づく安全への配慮、障がい者スポーツについて有する知識と経験に基づく活動内容の立案や指導者の選任を行い、参加者の交流が深まる部活動運営を行った。

④株式会社ウェルネスサプライ

…運動施設・教室運営経験に基づく安全への配慮、障がい者スポーツについて有する知識と経験に基づく活動内容の立案や指導者の選任を行い、参加者の交流が深まる部活動運営を行った。

(5) 神戸市

神戸市は、会場施設(神戸市シルバーカレッジ)および設備備品の提供や、フォーラムの周知等を行ない、事業に主体的に協力した。

7/24 開講式 久元喜造神戸市長来賓あいさつ



### 3. 本事業終了後の目指す方向性

事業期間を通じ運営手法やプログラムの開発を段階的に進め、事業終了後も公益財団法人こうべ市民福祉振興協会の事業として持続的に実施できるモデルを研究する。

## 6. 事業の実施結果

### (1) 効果的な学習プログラムの実施

①実施の経過（具体的な内容は6.（1）②に記載すること。）

4月	
5月	
6月	
7月	開講式・第一回講義(第四土曜日)
8月	※当初第二回講義(調理実習を含む)を実施予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況を踏まえ11月に延期した。
9月	第二回講義(第二土曜日)
10月	第三回講義(第二土曜日)
11月	第四回講義(第三土曜日)
12月	第五回講義(第三土曜日)
1月	
2月	第六回講義・閉講式(第三土曜日)
3月	

### ②具体的な内容

(効果的な学習プログラムに係る取組内容を具体的に記載すること。学習講座や活動等を開催した場合、実施スケジュールや内容、多様な者との交流や共同学習など共生社会の実現に向けた取組、障がい者本人の意見の反映や自主的な活動の促進、外部講師招聘及びボランティアスタッフ活用の有無、参加対象者のターゲット(障がい種・属性・活動規模等を含む。)等を記載すること。また、結果として、効果的な学習プログラムを提示し、根拠とともに記載すること。なお、実施結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。)

#### 1. 対象者について(開講時想定 と 令和3年度受講実績)

##### (1) 開講時想定

- ①「対象者の障がい種等にあらかじめ制限は設けず、受講者の具体の障がいに応じた支援の手

段を用意する」ことを方針として開講した。

②通年受講 20 名程度(介助者は員数外)を見込んだ。

(2) 令和 3 年度受講実績(通年受講生 27 名について)

1. 年齢別

18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳	24歳	25歳	26歳	27歳	28歳	29歳	30歳	計
1	5	4	1	2	1	2	1	5	0	2	0	3	27
6		11						10					

2. 男女別

男性	22	女性	5	計	27
----	----	----	---	---	----

3. 療育手帳程度別

A	B1	B2	計
3	12	12	27

講座内容の対象として想定していた「軽度から中度の知的障がい者」が、結果として実際の受講生の太宗を占めた。

(3) 「スポット受講」について

受講生同士の交流を深めるため通年の受講を原則としたが、会場の収容人数や運営体制の確保が出来る限り、希望者の事情に応じ特定の回のみを受講を受け入れた(スポット受講生)。

実績としては申込 4 名(実際の受講は 3 名)となったが、アンケート結果からは特定回のみを受講にも一定のニーズがあることが見て取れる。次年度も引き続き受け入れることを検討する。

(家族向けアンケートより)

★1 回からでも参加できるのが、こだわりのある子にとって参加しやすかったです。

## 2. 実施内容

(1) 講座概要

① 1 日の時間割

基礎的な教養講座とホームルーム活動、部活動、世代間交流行事などを組み合わせて実施した。

時間割	
9:00	受付、ホームルーム
9:35	講義 1
10:35	休憩
10:45	講義 2
11:45	ホームルーム
12:00	昼食
13:00	部活動、世代間交流行事 [15時終了]

- ・ 始業、終業(講義終了時)にホームルームを実施し、配置した「担任」のもと連絡事項の伝達やアンケート調査記入の時間とした。
- ・ ホームルーム、講義、休憩時間、昼食、放課後(部活動)と、学校生活を模した形態となったことで「クラス」の一体感を醸成し、相互の交流を促した。

②年間の実施スケジュール

就労する受講生の参加を容易とするため各回の開催は土曜日とした。

毎回午前中の講義に加え、9 月 10 月 11 月の計 3 回は午後部活動を実施、7 月 12 月の 2 回は午後世代間交流行事とした。

7月(7/24)	□講義：文化人類学入門 □世代間交流授業① マジック(手品)
8月(8/21)	□講義・調理実習：調理を通じて学ぶインド文化 → 11月に延期
9月(9/11)	□講義：化石のレプリカ標本を作ってみよう □講義：王子動物園再発見 □部活動：種目は各自選択
10月(10/16)	□講義：日本の鉄道—阪急・阪神電車の歴史 □講義：川崎重工業の創る未来 □部活動：種目は各自選択
11月(11/6)	□講義：調理を通じて学ぶインド文化(講義 + 調理実習) □部活動：種目は各自選択
12月(12/18)	□講義(A)：写真の魅力—自然を、人を、景色を自由に撮ってみよう— □講義(B)：ダンスを楽しもう—コンテンポラリーダンスで自己表現— □世代間交流授業② 巨大折り紙を通じて交流
1月	
2月 講義：2/12 フォーラム：2/26	□講義：神戸の歴史と文化—源平合戦と福原遷都 □閉講式 □実践発表フォーラム (@神戸市教育会館大ホール)
3月	

## (2) 講義（興味関心の広がり）

### ①特色

受講生の興味関心の幅を広げるため、在学中には学ぶ機会がなかった人文学、自然科学、表現・芸術等さまざまなテーマの講義を開講した。

テーマの広範さに加え、化石レプリカ作り、調理実習(カレー)、ダンス、写真撮影、といった実技実習を交えた多様な講義形態を導入した。

### ②運営上の工夫

(ア) 資料における視覚支援を意識し、受講生の理解の助けとした。

(イ) 受講生からの質問を受ける「質問タイム」や、講義内容に関するクイズを出題しつつ進行する等、双方向性を意識した。

質問タイムの様子



クイズの様子



アンケート調査にて、「講義内容が分かった」「講義内容に興味関心を持った」と答えた受講生の割合は回を通じて高く、また自由記述欄では講義での気づきやもっと知りたいことを記述する回答が多くあり、興味関心の触発や学びの経験を得たことが見て取れる。

1～6回講義平均値

先生の話が分かった	先生の話に興味を持った
88.9%	85.3%



(講義毎のアンケート調査 自由記述より)

★ペンギンのはんしょく期や、エサは何の魚をあげているのか教えてほしいです  
(9/11・動物)

★むかしのことをして見て今とちがうんだなあと思いました(10/16・鉄道)

★インドでは、カレー以外に何を作っているのかが気になりました(11/6・インド文化)

### (3) 部活動(仲間づくり)

しあわせの村の充実した運動施設を活かした運動系部活動を5種目実施し、受講生同士の交流の場とした。

スポーツ部(ノルディックウォーキング)

ダンス部

参加 受 講 生 と 種 目 と 数	スポーツ	6
	ダンス	8
	テニス	4
	卓球	7
	ボクシング フィットネス	2



※テニスや卓球等特定の競技種目を志向しない受講生に対しては、ドッジビーやノルディックウォーキング、ミニサッカー等、毎回異なるメニューで気軽に参加できる「スポーツ」部を設けた。

→部活動によって交流が深まる様子がアンケート調査結果でもうかがえる。

部活動は楽しかった	部活動の仲間と仲良くなった	部活動をずっと続けたい
96.2%	88.5%	73.1%

(アンケート自由記述より)

★みんなと楽しく踊れて、新しい自分にも出会えたと思いました(ダンス部)

★仲良くできた(卓球部)

### (4) 世代間交流行事(多様な人々との交流や共生社会の実現に向けた取り組み ①)

神戸市の高齢者生涯学習施設「神戸市シルバーカレッジ」の卒業生を中心に構成される「NPO 法人社会還元センターグループわ」内の「マジック(手品)クラブ」「笑い届け隊」の参加を得、公民館や小学校等での交流イベントの経験を生かしたゲームやグループワーク(巨大折り鶴作り)等を通じて世代間や受講生同士の交流の機会とした(2回実施)。

左: マジック大会(7/24)

右上: マジック大会(7/24)

右下: 巨大折り鶴づくり(12/18)



→交流行事を通じ、異世代とのコミュニケーションや仲間(受講生同士)の共同体験が受講生の印象に残る経験となったことがうかがえる。

	第1回 マジック(7/24)	第2回 折紙等(12/18)
楽しめた	91.7%	91.7%

(アンケート自由記述より)

- ★みんなでマジックしておもしろかった。親にもみせてあげた。(7/24 実施)
- ★巨大折り鶴って、協力し合うことが大事だと分かった。(12/18 実施)

(5) 運営の多様性 (多様な人々との交流や共生社会の実現に向けた取り組み ②)

①高齢者ボランティアスタッフの配置

講座開催場所とした神戸市の高齢者生涯学習施設「神戸市シルバーカレッジ」の卒業生が中心となって設立されたボランティア組織「NPO 法人社会還元センターグループわ」より、毎回の講座においてライフ・シンセリティ社と共同で、設営、登下校の安全確認、講義中の補助などの運営補助を担った。また、いかに発揮されるホスピタリティにより、何か困りことがあるればスタッフに気軽に声をかけられる関係性が構築され、受講生が安心して受講できる環境作りに寄与した。

講義補助の様子 (一緒に楽しみつつ、困ったときには寄り添いサポート)



→「グループ わ」にとっても、障がい者に対する理解が深まる経験を得たメンバーがいたことがうかがえる。

(アンケート 参画にあたり当初不安に感じていたことはあったか 自由記述)

★特にない

★上手く会話が出来るか

(アンケート 当初と比べ受講生に対する認識や接し方にあった変化等 自由記述)

★普通に接しているので特別認識していない

★本人たちを知ることで変化がありました。お互いに話し合う場が必要

②障がい当事者同士 特に同年代や「先輩」との交流

株式会社ライフ・シンセリティの運営する就労継続支援B型事業所「カレッジ・アンコラージュ」より、事業所利用者が毎回3名程度出役し、設営の補助、受付等の運営補助業務にあたったほか、一部の部活動や世代間交流行事では、受講生とともに活動に参加し、交流の機会ともなった。

受付の様子(紺色のユニフォームが事業所利用者)

世代間交流行事への参加の様子(同左)



→参画した事業所利用者にとっても有意義な経験であったことが、同行した支援者へのアンケートから見て取れる。

(アンケート B型事業所の利用者(研修生)の参画が有意義だったと思われた理由など 自由記述)

- ★受付、会場準備、昼食の準備、部活動の補助など幅広い仕事内容を1日かけてさせていただいたこと
- ★部活動や世代間交流に参加させて頂けたことで同年代の受講生もですが、グループわの皆さん、笑いとどけ隊のみなさんと世代を超えて交流させていただけたこと。
- ★大人数でチーム位になって連携してお仕事をさせていただくという機会がこれまでほとんどなかったので、その中の一人として働けたこと
- ★こうべ市民福祉振興協会のみなさん、グループわのみなさんが、仕事をサポートしてくださる中でお仕事が出来たこと

### 3. 障がい者本人の意見の反映や自主的な活動の促進

(1)部活動種目、一部の講義カリキュラムについて、本人の興味関心に応じ選択制とした。

#### ①部活動の選択(スポーツ・ダンス・テニス・卓球・ボクシングフィットネス)

7/24部活動オリエンテーションにて各部紹介の後、希望調査を実施した。

オリエンテーションでの卓球部の紹介

希望種目調査票



#### ②講義の選択(第5回講座)

12月の講座を「A 写真の魅力」と「B ダンスを楽しもう」から選択して受講。

写真講義(実技)の様子

ダンス講義(実技)の様子



→文化系部活動等、部活動種目の選択肢を広げるほか、受講生の主体的な学びに向けた取

り組みとして、ホームルーム活動で行事の企画・実行（バーベキューやクリスマス会、学習発表会等）を検討する。

## (2) 実行委員会への受講生の参画

希望する受講生2名が11月より会合へ出席し、講座の感想や改善点の有無、学びたいテーマ等について意見を交換した。

第4回実行委員会（11/2）の様子（右上画角内、右2名が受講生）



→受講生が参加しやすい会議日程や連絡方法、会議出席時の資料や説明の補足等については課題として継続的に手法を研究する。

## (3) アンケート調査にて当事者の意見の調査・反映

アンケートにて「新たに学んでみたいこと」「やってみたい部活動」「講義時間は長いかな」等、調査を行ない受講生も参画した実行委員会にて検討をおこなった。

今後希望する講義テーマ・新しく知りたいこと (自由記述より一部抜粋)		反映
JR の歴史、山陽電車の歴史、オーストラリアについて、イラストの書きかた、中華料理の実習、コーヒーについて、動画の撮りかた、寺社、旅行、水の生き物、植物 …		→ 講義テーマ選定の参考とする
60分講義は長かったか	あつという間 短くくらい 87.5% そうでもなかった	→ 60分という時間設定は○

## 4. その他実施事項（新型コロナウイルス感染症拡大防止対策）

①受付時の検温、体調確認の実施並びにマスク着用、手指消毒をスタッフの声掛けをこまめに行い確実に実施した。

②緊急事態宣言発出等外出制限が必要な状況又は本人及び家族の状態により実際の登校が難しい場合に於いても学びの機会を継続的に提供するため毎回の講座についてオンライン同時配信とした（Zoomのウェビナー機能を使用）。

→外出が難しい受講生にも受講機会を提供できたが(1名)、接続方法等のわかりやすい案内や、オンライン参加時の双方向性の確保については十分な蓄積ができず、次年度に向けた継続的な研究課題とする。

## 5. 実行委員会による自己評価

上記のプログラム実施結果に対し、アンケート調査結果を踏まえ実行委員会にて自己評価を行った。

※事業評価及びアンケート調査結果詳細については別添資料参照

(2) 連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係部局・民間団体等との連携体制の構築

①連携協議会の構成員

氏名	所属・役職等	備考欄
植戸 貴子	神戸女子大学 健康福祉学部 教授	委員長
上野 昌稔	神戸市教育委員会事務局 学校教育部 特別支援教育課 特別支援教育推進担当課長	
大本 正巳	公益社団法人 全国障害者雇用事業所協会 副会長	
小林 令伊子	神戸市福祉局 副局長	
村松 好子	兵庫県特別支援学校校長会 会長	
崎濱 昭彦	兵庫県健康福祉部障害福祉局 局長	
本條 誠	神戸市立特別支援学校校長会 会長	
高田 哲	神戸大学名誉教授 神戸市こども家庭局総合療育センター診療担当部長	
松端 信茂	一般社団法人兵庫県知的障害者施設協会 会長	
松原 建二	社会福祉法人かがやき神戸 理事長	
森崎 康文	神戸市立ワークセンターひょうご 所長	
奥脇 学	前公益社団法人全国障害者雇用事業所協会 理事 近畿ブロック長	
角野 寛典	株式会社KEGキャリア・アカデミー 代表取締役社長	
村田 淳	京都大学学生総合支援センター障害学生支援ルーム 准教授	
三木 孝	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 会長	
赤木 和重	神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授	
信田 敏宏	国立民族学博物館 グローバル現象研究部 教授	
高田 雅光	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会しあわせの村ユニバーサルコーディネーター 前 神戸市教育委員会事務局学校教育部特別支援教育課主任指導員	

②連携協議会事務局構成員（4. ②の担当者の兼務可。また、事務作業スタッフを除く。）

氏名	所属・役職等	備考欄
後藤 徹也	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 常務理事	
川田 誉史子	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 常務理事	
平塚 得生	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 企画運営本部 経営管理課長	

北尾 憲	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 企画運営本部 総務担当課長	
畑野 健一	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会 企画運営本部 経営管理課	

③連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係部局・民間団体等との連携体制の構築の実施経過（具体的な内容は6.（2）④に記載すること。）

4月	<p>第1回連携協議会（年度計画についての評価・助言）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各回講義の観覧（もしくはオンライン配信）</li> <li>・各回の（講義以外の一日を通じた）実施内容ダイジェスト動画及び講義の配信動画を委員会限定のアップロードサイトにて共有。</li> </ul> </div>	
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
1月		第2回連携協議会（評価方針・各アンケート調査結果の検討） →各委員フォーラム広報に協力
2月		連携協議会・実行委員会共催として実践発表フォーラムを開催
3月		第3回連携協議会（成果報告書案の検討）

#### ④具体的な研究内容

（連携協議会における議論内容、検討結果等を記載するとともに、「どのような者と連携すると効果的な実施体制・連携体制が構築できるか」等に関する分析・検証を行い、具体的な実施体制・連携体制等のモデルを提示すること。その際、自立や社会参加・就労等に関わる具体的なデータ・調査結果・事例等のエビデンスに基づく事業成果の分析・検証結果もあわせて記載すること。なお、実施結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

#### 1. 連携協議会の活動

##### (1) 毎回講座内容のフォローアップ

- ・各回講義の観覧（もしくはオンライン配信）
- ・各回の（講義以外の一日を通じた）実施内容ダイジェスト動画及び講義の配信動画を委員会限定のアップロードサイトにて共有。



## (2) 事業の検証・評価

受講生アンケート結果、障がい当事者を含む実行委員会による自己評価を踏まえ、事業について分析・評価した。評価にあたり評価軸として下記2点を定め、うち②については目標(本成果報告書5.1記載)に応じた3つの指標(ア・イ・ウ)に細分して検討を行なった。

### 【各評価項目における 評価基準は下記のとおり】

- ・ 指標の達成・未達成による評価 (達成できた=○ 達成できなかった=×)
- ・ 指標の達成度合による評価 (A B C 3段階評価)

※アンケート調査の当該指標に係る回答において、  
80%以上=A 60%以上 80%未満=B 60%未満=C

### ①学校から社会への移行期の障がい者への学習機会の創出

→評価:「○達成できた」(本年度実績 受講者数 30名 (うち3名スポット受講))

<委員の意見>

★サードプレイスとしてのユニバーサルカレッジ(松端委員 第2回連携協議会)

サードプレイス、部活動を通じた人間関係の広がりとして初年度十分に機能できていると感じる。

### ②学園生活を通じて受講生が獲得する力の維持・開発・伸長

(ア)知識や興味の広がり(知識 教養)

i)多彩なテーマによる講義プログラムの提供

→評価:「○達成できた」

ii)カレッジ受講を通じて新しいことを学んだ受講者数

→評価:「達成度 A」

iii)異なる講義のテーマに対し、興味関心を持つ経験をした受講生数

→評価:「達成度 A」

<委員の意見>

★「学校現場」にも生かしたい講義手法(上野委員 第2回連携協議会)

例えば写真の講義のように、先生から表現の仕方を教わって、自分で実践し、その成果をみんなに発表するという学びの経験は、学校現場でもぜひやってみたいと思わせる実践だった。

★知的障がい者にとっての学びのニーズを考えるきっかけに(赤木委員 第2回連携協議会)

「すぐに役に立つわけではない教養」に対する受講生の受容の様子やアンケート調査結果を見ると、学校教育を含め、知的障がいある生徒にとっての「学びのニーズ」について考え直すきっかけとなった。

(イ)学ぶ意欲の向上(自立性 主体性)

i)主体的な科目選択の機会の創出

→評価:「○達成できた」

ii)カレッジ運営への参画機会の創出

→評価:「○達成できた」

iii)学びの場への参加を今後も希望するか

→評価：「達成度 A」

(ウ) 様々な人との交流経験の積み重ね (コミュニケーション能力 社会性)

i) 受講生同士の交流機会としての部活動の実施

→評価：「○達成できた」

ii) 異なる世代間との交流機会としての世代間交流授業の実施

→評価：「○達成できた」

iii) グループや班による共同学習、体験機会の創出

→評価：「○達成できた」

iv) カレッジで仲間や友人が出来た受講生数

→評価：「達成度 A」

v) 受講生家族のユニバーサルカレッジへの評価

→評価：「達成度 A」

vi) 受講生所属先(職場・事業所)のユニバーサルカレッジ

→評価：「達成度 A」

※その他付随的に見出された点

「スタッフによる入口支援へのニーズ」

…困った様子を見せる受講生がいれば、講義中であってもスタッフが積極的に声をかけサポートしたことが、「主体的にカレッジのカリキュラムに取り組むための入口支援」として、受講生にとっても必要なものとして認識されていることが見て取れた。

(まとめのアンケート スタッフがいてくれてよかった時は? 受講生回答)

★複数回答：登下校 7 講義中 16 部活動 14 世代間交流 11 特になし 3

(まとめのアンケート 支援したシーンは? 運営参画事業者1グループわ ライフ・シンセリティ回答)

★複数回答：登下校 7 講義中 6 部活動 5 世代間交流 7 その他 5

※アンケート調査結果詳細については別添資料参照

## 2. 効果的な実施体制・連携体制 について

特別支援学校、障がい者が働く企業や就労支援事業所、支援機関、行政が連携することで、学校教育から卒業後における学びへの接続の在り方についての議論を深めることが出来た。

<委員の意見>

★支援学校在学中から意識的に卒業後の学びの機会につなぐことが必要(上野委員 フォーラム)

・ユニバーサルカレッジの成果について、特別支援学校は様々な学習機会に関する情報提供として高等部の生徒を中心として、伝えていく必要がある。

・在学中から生徒の特性を把握し、主体的に外界へ向かう力に課題がある場合は、「個別の教育支援計画」等を活用し、ユニバーサルカレッジ等のプログラムに参加できるようにつないでいくことが大切である。

★家族を含めた学齢期の障がい児への目配り(高田哲委員 第2回連携協議会)

主に学齢期の療育の現場にいるものとして、家族は先々のライフステージに不安があるので、このように学校卒業後も集まって学ぶ場が保障されているという情報があるの



は励みになる。

★「仕事上の勉強ではない」学びの場に参加ニーズは増えるだろう→企業との連携（大本委員 第2回連携協議会）

「企業での仕事としての勉強ではない」学びと交流の場になっていると感じる。参加者の話を聞いて、周りの社員も参加してみたいという声が多くなっている。

（参考：受講生所属先アンケートより）

③カレッジの話題をするときの受講生の様子		④学びの場へ受講生が参加することについてどう思うか	
とても楽しそう 楽しそう	16	とても良い 良い	16
あまり楽しそうではない 楽しそうではない	0	あまり良いと思わない 良いと思わない	0
無回答	0	無回答	0
計	16	計	16

とても楽しそう  
楽しそう 100.0%

とても良い  
良い 100.0%

### 3. 今後の事業への反映

→受講生の意見の反映については下記のような方向性で、引き続き課題として研究する。

(1) 事業目標「学ぶ意欲の向上(自立性・主体性)」の一層の促進として

★受講生の主体的な取り組みの拡充の検討

令和4年度計画として、ホームルーム活動で行事の企画・実行（バーベキューやクリスマス会、学習発表会等）等、自ら企画し発信する機会を検討する。

→事業の目標として掲げる「学ぶ意欲の向上(自立性・主体性)」

(2) 事業目標「様々な人との交流経験の積み重ね(コミュニケーション能力 社会性)の拡充として

★部活動種目拡充を検討(文化系部活動 等)する。

<委員の意見>

★今年度の実践に立ちコンセプトの再確認・精査を

(植戸委員長 第2回連携協議会)

例えば子育て世代のために「子育て中の人ばかり」が集まる場と、「子育て世代を含めた多世代が集まる場」の両方がある方がいいのと一緒に、こうした場(居場所)には2つの種類があると思う。「いろいろな人が一緒に学ぶ場」「障がいのある人のニーズに特化した学びの場」という2つに整理してコンセプトを練り直すということも今後必要ではないか。

(崎濱委員 第2回連携協議会)

次年度以降この事業の中心に「学び」か「遊び(交流)」のどちらを据えていくのか、精査していくと新たな展開がみられるのではないか。

★学びの場の広げ方(近藤委員 ※実行委員 補足意見)

「いろいろな人が一緒に学ぶ場」としての展開を考えると、知的障がいの隣接領域(グ

レーゾン)を次の対象にするという広げ方と、運営に大学生などを入れて、多様な学びがあることを知ってもらう中で、インクルージョンの道を増やすという方法などが考えられる。

(3) コーディネーター・指導者等の配置やボランティアの育成・活用等の検討

① コーディネーター・指導者等 (任意)

コーディネーター		
氏名	所属・役職等	備考欄
高田 雅光	公益財団法人こうべ市民福祉振興協会しあわせの村ユニバーサルコーディネーター 前 神戸市教育委員会事務局学校教育課特別支援教育課主任指導員	元神戸市教育委員会事務局特別支援教育課指導主事 元神戸市立友生支援学校校長 元神戸市立特別支援学校長会長 特別支援教育課主任指導員として神戸市立特別支援学校在籍生徒に対する就労支援事業等に長年携わる。
指導者		
氏名	所属・役職等	備考欄
田辺 真人	園田学園女子大学 名誉教授	ニュージーランド国立大学勤務後、園田学園女子大学教授を経て同大学名誉教授。地域史研究に対して兵庫県文化賞・宝塚市市民文化賞・神戸市文化賞・ロドニー賞、教育功勞に対して文部科学大臣表彰・兵庫県教育功勞者表彰受賞
文 (あや)	NPO法人DANCEBOX事務局 ダンサー	2009年新長田にArtTheater dB KOBEを開設。国内外のダンス作品の紹介やアーティスト育成、教育や地域と協働した創造的な事業を展開。
吉田 岳彦	阪神電気鉄道株式会社 監査役グループ	阪急阪神ホールディングス株式会社の特例子会社である株式会社あしすと阪急阪神取締役を経て、現在阪神電気鉄道株式会社の監査役スタッフ。
信田 敏宏	国立民族学博物館 グローバル現象研究部 教授 みんなくSama-Sama塾」主宰	社会人類学博士 (東京都立大学 2002) 東京都立大学人文学部社会学科助手を経て、2003年より民博。2017年より現職。
岩本 順平	一般社団法人 DOR 代表 写真家	2012年写真事務所を設立。2017年一般社団法人DOR設立。デザインやアートの地産地消をテーマに神戸市にて活動。
バシン 晴美	株式会社バシンホールディングス 代表取締役	1997年神戸北野にインドカレーの店「神戸アールティ」を開店以来7店舗を経営
生野 賢司	兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境評価研究部地球科学研究グループ/企画・調整室研究員	横浜国立大学大学院環境情報学府博士課程後期修了。博士(学術)。日本古生物学会、日本地質学会、日本動物分類学会、日本地球惑星科学連合所属
竹原 孝弘	神戸市立王子動物園 副園長	神戸市立王子動物園 副園長
澤田 敏夫	公益財団法人産業雇用安定センター 一参与 前 川重ハートフル株式会社 取	川崎重工業株式会社の特例子会社として2013年9月に設立され、一般事務請負や清掃業務を行なう同社の取締役を経て現職。

	締役:	
吉川 史浩	一般社団法人 WGM 代表理事	元特別支援学校保健体育講師。 ツリーインゲインストラクター。一般社団法人 WGM 設立。車いすによるツリーイング(木登り)等、障がいの有無に関わらず自然活動を提供する。冒険教育指導者 レスキュー3(テクニカルロープレスキュー) 資格取得

②実施経過（具体的な内容は6.（3）③に記載すること。）

4月	
5月	
6月	
7月	開講式・第一回講義(第四土曜日)
8月	講師事前打ち合わせ
9月	第二回講義(第二土曜日) 講師事前打ち合わせ
10月	第三回講義(第二土曜日) 講師事前打ち合わせ
11月	第四回講義(第三土曜日)
12月	第五回講義(第三土曜日)
1月	講師事前打ち合わせ
2月	第六回講義・閉講式(第三土曜日)
3月	

③具体的な内容

（コーディネーター・指導者等の配置やボランティアの育成・活用等に係る検討結果等を記載すること。また、「どのような専門性を有する者がコーディネーター・指導者等の役割に適しているか」、「具体的にどのように配置・活動すべきか」等に関する見解もあわせて記載すること。なお、検討結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

<p>1. コーディネーター</p> <p>長年教育者として地域における特別支援教育と障がい者就労について携わった経験を有するコーディネーターを配置し、教育部局・民間団体等との連携を図った。</p> <p>運営に係る再委託先や外部講師との打ち合わせにおいても、コーディネーターの持つ経験・知見が発揮され、適切な受講生への配慮等、特別支援教育の経験を活かした運営上の指導助言を行うことができた。</p> <p>2. 指導者（外部講師）</p> <p>(1) 講座講師</p> <p>講師として、受講生の興味関心に応えられる幅広い知識や経験を有しているものを選任した。障がい者への指導経験がない指導者については下記の点を共有することで受講</p>
---

生の理解をたすけ、興味関心を持つ講義運営を心掛けた。

- ・資料における視覚支援の必要性
- ・受講生からの質問を受ける「質問タイム」や、講義内容に関するクイズをこまめにはさみつつ進行する等、双方向性を意識した構成とすること

## (2) 部活動指導者

部活動における外部講師には、安全上の配慮からも障がい者との活動経験のあるものを配置した。部活動においては必ずしも技術の熟達を目標とせず、受講生同士の交流に重きを置いて運営を行った。

(アンケート 受講生同士の交流を促すため留意したこと 部活動指導者 自由記述)

★二人組のワークや、円座でのワークなど。顔が見える関係を作った。(ダンス)

★ラケットでのハイタッチなど、何か頑張った後は、必ずしていました。すると、自然に受講生同士が行うようになりました。(テニス)

★2グループに分け、チーム戦での球当てゲームの練習をしました。応援をし、仲間の成功を喜び、受講生同士の距離が縮まりました。(卓球)

## 3. その他(スタッフとして関わる中での気づき・共育ち)

### (1) グループわ…受講生の主体的な学びを後押しする積極的なかわり

講義の補助・部活動支援等に配置したNPO法人「グループわ」は、神戸市の高齢者生涯学習施設「神戸市シルバーカレッジ」卒業生が中心となって構成されているボランティア組織であり、幅広い知識や経験を有する、意欲ある高齢者集団である。

今回再委託先として参画する上で、運営事務・実務だけではなく受講生とのコミュニケーションを活発に図り、講義や(教室や部活動実施場所への)移動時などに、受講生が「講師が今資料のどの部分を話しているのかわからなくなった」「トイレに行きたい」「次にどこに集合か」といった小さな「困りごと」を気軽にスタッフに声掛けできる雰囲気醸成したことは、主体的な学びをする上での入口支援となった。

翻って「グループわ」のメンバーにとっても今後の活動に資する経験を得た。

### (2) ライフ・シンセリティ…受講生と同世代のスタッフとして、また一人の若者として

株式会社ライフ・シンセリティが運営するB型就労継続支援事業所の利用者が運営補助スタッフとして参画した。一部の部活動や世代間交流行事では、受講生とともに活動に参加し、交流の機会ともなった。受講生とグループわのメンバーの世代間交流と相似形をなす、運営スタッフ内においてもB型事業所利用者とグループわの世代を超えた協同体験が、大きな経験となった。

### (3) スタッフが受講生と関わるうえでの第1歩を後押しする「経験者」の存在の重要性

株式会社ライフ・シンセリティが運営するB型就労継続支援事業所同事業所のスタッフは、「クラス担任」として受講生の一体感を醸成し交流を促した。また支援員はそれぞれの特性を把握し細やかな目配りを行なうことで安全な事業実施の下支えとなったほか、必要に応じグループわや振興協会職員が受講生との接する上での注意点をアドバイスする等、スタッフと受講生との円滑なコミュニケーション形成に寄与した。

(4) 成果等の普及

①実施経過（具体的な内容は6.（4）②に記載すること。）

4月	
5月	
6月	
7月	SNS 発信 開講についてプレスリリース(NHK・神戸新聞に掲載)
8月	
9月	SNS 発信
10月	SNS 発信
11月	SNS 発信
12月	SNS 発信
1月	ウェブサイトの整備 フォーラム告知
2月	SNS 発信 実践発表フォーラム開催 報告書作成・公開
3月	

②具体的な内容

（成果等の普及に係る取組内容を具体的に記載すること。成果報告会等のフォーラム等を開催した場合、実施スケジュールや内容、参加者の属性（地方公共団体・関係団体・一般等）等を記載すること。（参加者実績については、下記表を参考に記載すること。）なお、取組の結果を踏まえて今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

1. ウェブサイトの開設を行ない情報発信のプラットフォームとして活用した。  
[http://www.kobe-wa.or.jp/universal\\_college.html](http://www.kobe-wa.or.jp/universal_college.html)



2. 成果報告書（本書）の作成を行なった。また報告書提出後すみやかにウェブサイトへの掲載を行なう。
3. 開催のつど SNS を通じた情報発信を行なった。  
こうべ市民福祉振興協会を代表法人とする共同事業体が指定管理者である「しあわせの村」公式 SNS にて開催の都度発信した。





- ・運営スタッフ、講師、受講生の立場からの気づきや感想の報告を行なった。



受講生…勉強が出来てうれしかった。部活動も楽しかった。マジックも職場で披露して盛り上がった。カレの先生のお店やダンスの先生の教室にも行ってみた。来年も参加したい。

受講生…休みの日に行く場所が出来てうれしい。歴史も興味あったのでおもしろかった。カレッジで共通の趣味を持つ友人が出来て、今でも連絡を取り合っている。

運営・交流行事…障がい者との関わりを経験したことがあるメンバーもそうでないメンバーもおり参加するまでは心配もあったが、実際に接すると、一生懸命交流を図ってくれて不安はなくなっていった。今後は、自主的な活動を増やしたり、文化部等部活動を拡充したり、今年度の受講生が先輩として関わっていく仕方を考え、サポートしたい。

担任・運営…担任という仕組みを持つことで、クラスとしてのつながりを促した。来年度以降受講生が自分を発信する場としてのクラスづくりをやってみたい。

部活動講師…参加者がお互いをよく知ることを大事にカリキュラムを組んだ。実技では2名の指導者を置き受講生に混ざって同じ目線で進行を心掛けた。自身の主宰するダンス教室にカレッジがきっかけで3名が来てくれている。カレッジでの経験が外に出て社会につながる小さな種・芽になっている。

## ②パネルディスカッション

・学識経験者、福祉行政、教育行政、学校教育、各分野よりの登壇者を得て、基調として青年期の学びの場が持つ意義、障がい者の青年期の学びの場の拡充の歩みを共有し、各分野の登壇者より KOBE しあわせの村ユニバーサルカレッジの実践について討議・評価を行い、将来に向けての提言として総括した。



渡部昭男氏…青年期は①学校から社会へ②子どもから大人へという2つの意味で移行期であり、様々な「揺れ動き」を経験するなかでかけがえない自分を作る時期である。その時期の学びは人生を彩る。

上野昌稔氏…卒業後の追指導では「就労の定着や人間関係」に注意を向けがちだった。今回カレッジに関わって「人生を豊かに」という視点をもっと大切にすべきだと感じた。

崎濱昭彦氏…カレッジの実践の地域への展開を考えたとき、一般の塾や習い事でもカレッジでやったような運営の工夫や講義を知ってもらうことで、今まで行きにくかったところに行ってもらいやすくなるという流れやサポートする仕組みを作れないか。今後も各種情報支援と社会参加機会の拡充に努めていきたい。

村松好子氏…「ひようご障害者の生涯学習」連携コンソーシアムのアンケート調査を見ても、職場でも家庭でもない場へのニーズは高いのに実際に行動に移せていない現状がある。人生100年時代を見据えた豊かに生きるための学びの場としてのカレッジの取り組みが、博物館等社会教育施設での講座のモデルとなるのではないかと感じた。

#### 提言(渡部昭男氏)

…ユニバーサルカレッジから博物館等地域の社会教育施設に出前授業を持ち掛け、障がい者の生涯学習講座運営に関するノウハウを伝えていくという展開も考えられる。

…学校教育において個別の支援計画・個別の移行支援計画の中に、社会教育・生涯教育についての項目を追加し、学びの場について伝え卒業後にどういう風に伝えるのかを盛り込むことも提案したい。

#### 総括・提言(ファシリテーター 植戸貴子氏)

- ・当事者の「学びたいニーズ」がとても高いことを改めて実感した。ユニバーサルカレッジは、こうしたニーズにこたえる学びの場であると同時に、職場でも家庭でもない第三の居場所として、新たな人と人の出会いの場になっている。
- ・今回の発表や講座の参観を通じ、これまで見えていなかった受講生の新たな一面・可能性に職場や事業所の人気が付くきっかけになった。
- ・運営に参画したスタッフにとっても交流の中で気づきを得る機会となったことがうかがえる。
- ・情報・機会・適切な支援があれば「より多様な人が・一緒に学ぶ」ことが可能



になる。カレッジの実践を活かし、障がい者が街に出て、地域の人も障がいを理解し、教えあう・支えあう状態＝ソーシャルインクルージョンにつなげていきたい。

### ③質疑応答

★社会に学生を送り出す学校の立場から、卒業後はこんなことに取り組んでほしいと思うようなジャンルはあるか？(障がい者就労企業関係者)

→今の時代多様なジャンルがあると思うので特定の分野は定めにくい。人生を彩るような、魂が揺さぶられるような学びとは何かと、考えたり探したり、話し合う場があるといい。

★こうした学びの場を行政で取り組むとき、企業として支援出来ることは何か？(障がい者就労企業関係者)

→施設・設備だけではなく、専門的な知見を持つ人材の協力をいただければありがたい。例えば外出することへのハードルが高い方への支援として「電子居場所」を県でも取り組んでいるが、アニメーションや鉄道などそれぞれのルーム内でテーマを設ける場合ファシリテーター的な存在が必要になる。

### (3)参加者（参加 80 人 うちオンライン 31 人）

参加者内訳	計		うち来場	うちオンライン
カレッジ受講生	4	5.0%	3	1
受講生のご家族	3	3.8%	2	1
行政関係者	6	7.5%	3	3
教育関係者	15	18.8%	5	10
企業関係者	2	2.5%	2	0
福祉事業所関係者	8	10.0%	5	3
障がい者関係団体関係者	5	6.3%	4	1
一般参加者	11	13.8%	5	6
運営事務局関係者	26	32.5%	20	6
(人)	80		49	31

(参加者アンケートより)

★学校以外の場での活動に興味をもてるように、そのきっかけを在学中から提供していくことの必要性を感じました。(教育関係者)

★本人たちが学べる機会があったことはとても感謝しています。それにも増して学校や行政、民間の企業の方たちが歩み寄り前向きに取り組んでくださっていることを知り、とてもうれしく感じました。(受講生家族)

★参加している社員に良い変化が見えてきたが、それはユニバーサルカレッジの影響があるのではないかと感じた(企業関係者)

(別紙「KOBE しあわせの村ユニバーサル実践発表フォーラム」参照)

(5) 広域的な研究成果普及・人材育成等を目的としたブロック別コンファレンスの実施  
(3. において「ブロック別コンファレンス」の実施を選択した場合のみ、6.(5)①、②について記載すること。)

①実施経過（具体的な内容は6.（5）②に記載すること。）

4月	
5月	
6月	
7月	
8月	
9月	
10月	
11月	
12月	
1月	
2月	
3月	

②具体的な内容

（ブロック別コンファレンスの取組内容を具体的に記載すること。実施スケジュールや内容、参加者の属性（地方公共団体・関係団体・一般等）を明確にした上で、具体的に記載すること。（参加者実績については、下記表を参考に記載すること。）なお、取組の結果を踏まえて今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

--

（A）参加者の属性について

	合計（人）
<b>属性別参加者数</b>	
（内訳）	
行政関係者（教育委員会）	
行政関係者（首長部局）	
学校教育関係者（大学等関係者を除く）	
大学等関係者	
公民館等社会教育施設関係者	
社会福祉法人関係者	
NPO法人関係者	
企業関係者（商工会等含む）	
保護者団体関係者（親の会・手をつなぐ育成会等含む）	
その他一般参加者	
運営事務局関係者	

※把握している属性項目によって追加して記載すること。

(B) メディアインパクト（報道等での周知状況）

	件数
新聞	
ラジオ	
テレビ	

※該当がある場合、別途参考となる資料を添付のこと。

## 7. 本実践研究事業の実施により得られた成果・効果

(自立や社会参加・就労等に関する具体的なエビデンスに基づく成果・効果、本委託事業終了後の成果の活用方針・手法等)

(1) 事業の実施により直接的に得た成果／アウトプット目標※数値を用いる等して具体的に記載すること

- ①学校から社会への移行期の障がい者への学習機会の創出
  - 【当初目標】20名 → 【実績】30名(うち3名は特定の回のみスポット受講)
- ②学園生活を通じて受講生が獲得する力の維持・開発・伸長
  - (ア)知識や興味の広がり(知識 教養)
    - i)多彩なテーマによる講義プログラムの提供
      - 【計6回 9講座開講】
    - ii)カレッジ受講を通じて新しいことを学んだ受講者数
      - 【カレッジで新しいことが学べた…83.3%】
    - iii)異なる講義のテーマに対し、興味関心を持つ経験をした受講生
      - 【興味を持った…85.2%】
  - (イ)学ぶ意欲の向上(自立性 主体性)
    - i)主体的な科目選択の機会の創出
      - 【部活動…5種目の選択・講義…ダンス11人・写真16人】
    - ii)カレッジ運営への参画機会の創出
      - 【2名の受講生が実行委員会へ参画】
    - iii)学びの場への参加を今後も希望するか
      - 【今後も学びの場に参加したい…87.5%】
  - (ウ)様々な人との交流経験の積み重ね(コミュニケーション能力 社会性)
    - i)受講生同士の交流機会としての部活動の実施
      - 【5種目を計3回実施】
    - ii)異なる世代間との交流機会としての世代間交流授業の実施
      - 【計2回実施】
    - iii)グループや班による共同学習、体験機会の創出
      - 【講義：班ごとに分かれた化石レプリカ作り、調理実習】
      - 【部活動：各部活において交流を意識した運営】
      - 【交流行事：班別対抗ゲームや、巨大おりづるなど共同作業】
    - iv)カレッジで仲間や友人が出来た受講生数
      - 【仲間や友人が出来た…87.5%】
    - v)受講生家族のユニバーサルカレッジへの評価
      - 【カレッジのことがとても話題になった・話題になった計…84.2%】
      - 【カレッジの話題をする受講生の様子：とても楽しそう・楽しそう計…89.5%】
      - 【学びの場に参加することについて とても良い・良い計…89.5%】
    - vi)受講生所属先(職場・事業所)のユニバーサルカレッジへの評価
      - 【カレッジのことがとても話題になった・話題になった計…87.5%】
      - 【カレッジの話題をする受講生の様子：とても楽しそう・楽しそう計…100.0%】
      - 【学びの場に参加することについて とても良い・良い計…100.0%】

(2) 事業の実施により終了後（中長期的）に得た成果／アウトカム目標

※数値を用いる等して具体的に記載すること

教育関係者（学生を社会に送り出す側）、障がい者が働く企業や就労支援事業所（学生を社会で受け入れる側）双方に生涯学習の重要性が認知され、本事業のモデルを活かした同種の学習活動が、広がることを目標とする。

本年度は上記目標達成の第一段階である「生涯学習の重要性の認知」について主に取り組み、一定程度の達成を見た。

また上記の点のほか初年度の実践を通じて得られた成果として下記3点を挙げる。

- ①カレッジが学びのニーズにこたえる場だけではなく、職場でも家庭でもない第三の居場所・新たな人と人の出会いの場」としての性質を持っていること。
- ②受講生の新たな一面・可能性に職場や事業所の人気が付くきっかけになった。
- ③運営に参画したスタッフにとっても交流の中で気づきを得る機会となった。

上記3点をふまえ、情報・機会・適切な支援があれば「より多様な人が・一緒に学ぶ」ことが可能になる。カレッジの実践を活かし、障がい者が街に出て、地域の人も障がいを理解し、教えあう・支えあう状態＝ソーシャルインクルージョンにつなげていきたい。

※障がい者就労企業・事業所の反応（受講生所属先アンケート結果より）

③カレッジの話題をすときの受講生の様子		④学びの場へ受講生が参加することについてどう思うか	
とても楽しそう 楽しそう	16	とても良い 良い	16
あまり楽しそうではない 楽しそうではない	0	あまり良いと思わない 良いと思わない	0
無回答	0	無回答	0
計	16	計	16

とても楽しそう  
楽しそう 100.0%

とても良い  
良い 100.0%

- ・新しい知識、社会のいろいろなお話し、市長も来られたこと、イベントも多彩で、楽しそうでした。
- ・ご本人はとても楽しく通われている様子でした。部活動で友達ができたことをうれしそうにお話されていました。今後もこのような機会があれば事業所としてもうれしいです。

※家族の反応（受講生家族向けアンケートより）

④学びの場へ受講生が参加することについてどう思うか	
とても良い 良い	17
あまり良いと思わない 良いと思わない	0
無回答	2
計	19
とても良い 良い	89.5%

- ・学校を卒業すると全く居場所（デイに行っていたので）や余暇活動、友達との交流や運動する機会がいきになくなったので、このようなイベントは本当にありがたいです。
- ・内容的に難しいと思うこともあったようでした。それでも、新しい知識を得る場として、障がい者にも機会があることは、とても望ましいことと思っています。本人も楽しそうに行かせて頂きました。
- ・一人で参加させるのは心配でしたが、スタッフの方がたくさんいてサポートしてくださったので安心して任せることが出来ました。鉄道の講義を一番楽しみにしていましたが他のことも講義を受けると楽しかったようです。

※フォーラムアンケート結果より

学校卒業後の学びの場について大切と思う 94.9%

・学びたいニーズがある。学ぶ機会と場をつなぐことが出来ていない現状がある。(行政関係者)

(3) 本委託事業実施により得られた成果をどのように活用するのか。またその計画について、具体的に記載すること。

委託事業期間を運営手法やプログラム内容についての試行期間と位置づけ、試行を経て獲得した運営モデルをベースに、委託事業終了後は神戸市の協力によりこうべ市民福祉振興協会の事業として、障がい者の生涯学習の場を発展させる予定である。

当事業で得られた成果を学校(学生を社会に送り出す側)、障がい者就労企業・事業所(学生を社会で受け入れる側)、当事者・家族、に対しフィードバック(共有)することで、障がい当事者が社会での活躍の可能性を広げることに資する学びの場のひろがりを目指す。

さらに今後はこのような取り組みが、障がい者と障がい者を支援するコミュニティにとどまらず、広く市民のための社会教育施設・一般企業等に広まることにより、全市的なソーシャルインクルージョンの実現の一助となることを目指す。